

「第9回日本語教育推進関係者会議」

事例共有

「日本語の学習者としての意見」

桃山学院教育大学教育学部准教授
オチャンテ 村井 ロサ メルセデス

発表の概要

- ①自己紹介・ライフヒストリーについて
- ②求められる支援について
- ③まとめ



自己紹介

- 名前
- Rosa Mercedes Ochante Muray
- オチャンテ 村井 ロサ メルセデス
- 日系4世のペルー人 / 移民1.5世代
- 1996年12月来日 関西空港→三重県伊賀市
- 日本での滞在歴28年
- ※未成年であったため、日系3世の扶養として
- 「定住者」→「永住者」

地元の三重県・伊賀市



伊賀市における外国住民数の現状

・ 6,109人（伊賀市の総人口84,936）

人口比（7.19%）

伊賀市における日本語指導が必要な
外国人生徒（中学生）の進学等状況の経年変化

	平成28年3月	平成29年3月	平成30年3月	平成31年3月	令和2年3月	令和3年3月	令和4年3月	令和5年3月
外国人生徒卒業生数	19人	23人	20人	38人	20人	26人	21人	19人
進学等をした生徒の割合	90.50%	82.10%	80.00%	97.40%	76.90%	100.00%	95.20%	94.70%

（出典：2024年9月末伊賀市在住外国人の現状
伊賀市外国人生徒の公立中学校卒業後の進路状況調べ）

伊賀市内の中学校→

上野高等学校定時制→大学



中学校生活1997年1月～3月卒業

私 15歳（中等教育4年）→中学校3年生

兄 16歳→学齡超過（当時の校長先生の判断で入学）

弟 6歳（小学校2年）→保育園

中学校の国際教室：初期適応教室としての役割を果たし、学習者にとって居場所ともなっていた。

日本語学習：毎日継続して日本語を学び、短期間でひらがな・カタカナ、そして小学校1年生程度の漢字を習得した。

伊賀市内の中学校→

上野高等学校定時制→大学



1997年4月定時制高校進学

ほぼ日本語ゼロという状態で兄と高校に入学

(当時の校長先生の判断で入学)

授業内容の柔軟性: 学習者は兄と二人で学び、必要に応じて授業内容を柔軟に変更していた。

継続的な日本語学習: 継続的に日本語を学ぶ場が提供され、日本語能力試験(3級、2級)に合格し、大学進学を目指した。

支援体制の整備: 高校3年生からスペイン語学科の学生が支援に入り、母語によるサポート、通訳、翻訳の体制が整えられた。

・課題

・担当の日本語教員は日本語が専門ではなかったが、熱意があり、教材を一から作成していた。最初は漢字の勉強、途中から日本語能力試験の教材を使った。

→ペルーにいた時から学習する習慣がついていた・環境も整っていた。

将来大学に進学したい希望も持っていた。

→確かな目標でモチベーションを上げることができた。

⇒友達理解、受入れがあって、支え合う仲間ができた。

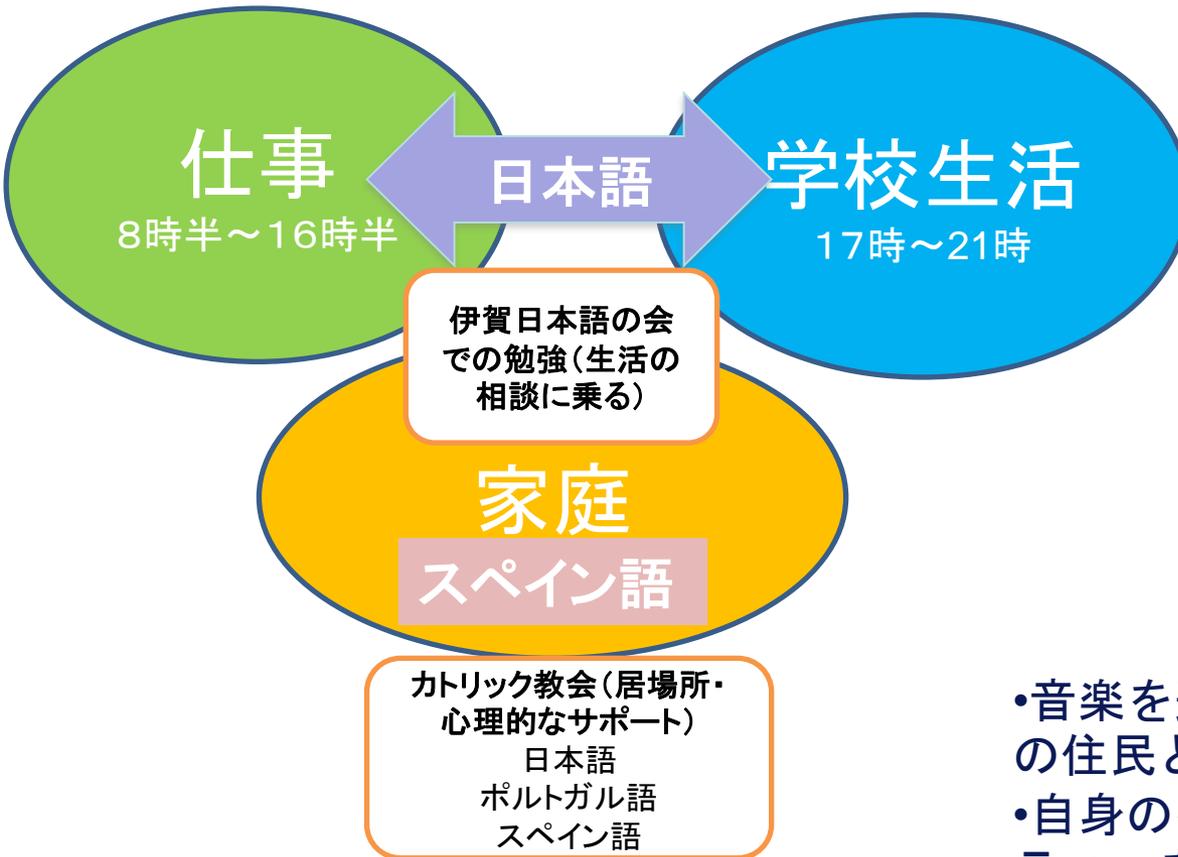
初期段階の支援

専門性と熱意のある人材による指導で日本語で学ぶ力を早く・確実に獲得

今の学習は将来とどう繋がるのか。

定時制高校での生活

地域のボランティア・エスニックコミュニティとの連携



ペルーの民族音楽紹介活動を通して文
化交流もできた



- 音楽を通して、地域の子どもたち、地域の住民と仲良くする機会を設けていた。
- 自身のペルー人としてのアイデンティティを再確認することができた。

※孤立することはなかった。

高等学校卒業後の進路支援



大学→京都ノートルダム女子大学

・小規模のカトリックの大学、入学後のサポートも充実していた。

(学科長との個別面談、先輩の指導、シスターの支援)

大学院→三重大学大学院人文社会科学研究科地域文化論専攻修士課程
修了

5年間 教育委員会 小中学校教育課 外国人児童生徒巡回相談員、
奈良学園大学人間教育学部で講師を得て、

★現在桃山学院教育大学人間教育学部准教授

外国につながるのある児童生徒への支援

- ・ 大学生との交流会、居場所提供・地元意識をつけさせている



支援や課題について（自分の体験から）

- ・ 高等学校4年＋大学2年＝6年間、継続的な日本語指導・進路支援

学習言語を習得するまで、きめ細かなサポート体制が整っていた。

- ・ 高度の人的資本を持っている地域のボランティア・エスニックコミュニティからのサポートが常にあった。（自らも情報を求めている）

当時課題と感じた点、アドバイスだけ乗り越えられない壁
受けられる奨学金の数が少なく、経済的制約があった。

例) クラブやサークルの合宿を断ったり、
常に支出の優先順位をつけていた。

高等学校中途退学に繋がる要因 (研究から)

- (1) 学力の問題 (授業にはついていけない)
- (2) 高校でのいじめ (馴染めない、不登校の経験)
- (3) 高等学校の教育制度が十分に理解されていない
 - 普通科・進学校・職業コースとは
 - 保護者にも教育制度の理解、
第2言語習得の苦勞の説明等)
- (4) 経済的な問題が挙げられる。

→ 要因は一つだけではない。

自分の将来の実現に近い高校よりもアクセスしやすい高校に進学する
(※限られた選択の中で選んでいく)

- ・地域の同じルーツのロールモデルとの交流、保護者向けのロールモデル (家族の関与・進学への後押し)、地域のキーパーソンを巻き込む
- ・進路指導やキャリア教育を通して多様な職業につく可能性、明確な展望を描けるような支援が早い段階から求められる。
 - ・学校の教科が苦手であっても、何かの特技を活かした職業選択ができる情報提供と接点作り <例> 地元の伝統産業 (手仕事・職人技) に触れる機会を演出

進学を果たした者の共通点 (高校・大学等)

- 早い段階から「**なりたい自分**」という目標設定をしている
- 中学校・高校から**自信を持てる教科が一つ**ある。
(インタビュー11名中6名とも英語に自信を持っており、周りの同級生から「発音が綺麗」などと褒められる) (オチャンテ2020)
- 大学生になってから母語の大切を理解し、第二言語として学習するようにしていた。(学校で母語を使うとからかわれる、恥ずかしいから使わないようにしていた。) → バイリンガルを励ます学級の大切さ

• 文化・言語等多様なリソースを持っている彼らの強みに気づかせる、活かせる環境を提供する。
子どもたちの自尊感情を高める活動が求められる。

「共に学べる環境の重要性」

• 日本語の個別な指導の時間数が限られており、学級で過ごす時間は圧倒的に多い

- 日本語教育の専門性のある人材の育成、研修とネットワークづくり ※そのための予算化、モデル事業の制度化
- 居場所として感じられる学級・学校(受け入れられている、所属感のある、本当の自分を出せる場所)
- 学校現場への「やさしい日本語研修」の必要性:やさしい日本語を授業で用いることは、授業のユニバーサル・デザインにつながり、「多様な困難さ」を抱える子どもたちの授業理解にも役に立つ。

教員養成大学から学ぶプログラム:人権意識、「日本語」の教え方(国語教科とは違う)、外国人児童生徒、外国人労働者の抱えている課題

登録日本語教員資格を取得するためのインセンティブ

まとめ

- ・継続的な日本語学習の機会(高等学校4年+大学2年=計6年間)
- ・目標設定の早期化:「なりたい自分」や「大学に行く」という具体的な目標を早い段階で設定していた。
- ・ロールモデルとの交流:地域に同じルーツを持つロールモデルとの交流を通じて刺激を受けた。また、保護者自身も地域のロールモデルとして他の保護者の相談相手になっていた。
- ・日本では、社会的資源の限られた環境にいたため、保護者からは学ぶのが難しい社会の仕組み、正規・非正規の違い、生涯賃金の概念、言葉遣い、マナー等を支援者から学ぶことができた。常に相談するところがあった。
- ・学校・管理職の理解と支援 **+** 地域のボランティアによるサポート、常に励ましてくれる大人がいた。

→地域の取り組み・環境によって進路が左右される(?)。三重県の伊賀市でなければ同じ進路を歩むことができたのか。

【参考文献】

- ・オチャンテ 村井 ロサ メルセデス 「ニューカマーの子どもたちの義務教育後の進路選択と将来の展望」梶田叡一 『教育フォーラム54 各教科等の学習を支える言語活動 言葉の力をどう用いるか』 金子書房、2014年8月 pp.118-126
- ・オチャンテ 村井 ロサ メルセデス「公立の小-中学校の不登校-不適應における生徒指導の課題 —外国人児童生徒の困難な体験からの考察—」奈良学園大学紀要第5集pp.27-35, 平成28年9月
- ・オチャンテ 村井 ロサ メルセデス「高等学校中途退学の現状と生徒指導の課題—外国人児童生徒における体験からの考察—」人間教育学研究第4号平成29年3月
- ・オチャンテ 村井 ロサ メルセデス、オチャンテ カルロス「カトリック教会における多言語・多文化環境の実態—三重県伊賀市の事例—」奈良学園大学紀要第7集pp. 167-177, 平成29年9月
- ・オチャンテ 村井 ロサ メルセデス「ペルーと日本を「移動する子どもたち」の学校生活とアイデンティティの揺らぎ—いじめ、適應にあたっての困難な体験からの考察—」奈良学園大学紀要第9集pp. 31-45, 平成30年10月
- ・オチャンテ 村井 ロサ メルセデス「移民第二世代の進路選択・キャリア形成支援における課題—三重県の事例を中心に—」桃山学院教育大学研究紀要第3号 2020年
- ・厚生労働省「日系人帰国支援事業の実施結果」
https://www.mhlw.go.jp/bunya/koyou/gaikokujin15/kikoku_shien.html
- ・「視覚的言語自伝に見る移民 1.5 世の複言語主義-被支援者から支援者への道のり-」『多言語化する学校と複言語教育 複数の言語と文化を生きる子どもの教育支援』(共著、明石書店、2022年)
- 「移民第2世代のキャリア形成支援における展望と課題 —コミュニティにおける実践の記録」樋口直人(他)編『ニューカマーの世代交代—日本における移民 2 世の時代』(共著、明石書店、2023年)等、多数。
- 「奇跡の主の祭りからみる在留ペルー人の信仰」樋口直人(他)編『ペルーから日本へのデカセギ 30 年史:Peruanos en Japón, pasado y presente』(共著、インパクト出版会、2024年)等、多数。
- ・ Feliciano, Cynthia & Rubén G. Rumbaut, 2005, “Gendered paths: Educational and occupational expectations and outcomes among adult children of immigrants”, *Ethnic and Racial Studies* Vol. 28 No. 6, pp. 1087-1118.

ご清聴
ありがとうございました。
¡ Muchas gracias!
Muito obrigada!
Merci beaucoup!
Thank you very much!

